本庄国際奨学財団 Honjo International Scholarship Foundation 2021 WINTER Vol.7
発行：公益財団法人 本庄国際奨学財団
〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷1-14-9
[TEL] 03-3468-2214 [FAX] 03-3468-2606
[E-mail] info@hisf.or.jp [URL] https://www.hisf.or.jp

2021.1

本庄国際奨学財団

Honjo International Scholarship Foundation

2021 WINTER 機関誌 Vol.7

本庄国際奨学財団

Honjo International Scholarship Foundation

Vol.7

目次

02 理事長挨拶
財団の概要
03 公募案内
04 NEWS
春風荘便り／寄付金のお礼／追悼
05 エッセイ① ── サンフォ モハマドウ バシル ジャンバディスト
教育が世界を変える
07 エッセイ② ── 代田 七瀬
銀座のホステスは聴き上手？
09 エッセイ③ ── ジャスティン クレーマー
タイにかける橋 ～ファランの一考
11 第1期高校生奨学生です！
15 同窓会を開催しました
17 1年間の活動（2019年度）／ Activities in 2019

Contents

Words from the President 20
About Us
Guideline for Scholarship and Research Fellowship in 2021 21
NEWS 22
Letter from Shunpu-so / Thanks for the donation! / Obituary
Essay ① ── SANFO Mohamadou Bassirou Jean-Baptiste 23
Reaching out to the world with education
Essay ② ── Nanase Shirota 25
Are Ginza hostesses are good listeners?
Essay ③ ── Justin Kraemer 27
Building bridges in Thailand: the reflections of a farang
Highschool scholarship students 29
Reunions held 33

表紙イラスト 小渕 暁子 *Cover illustration* ***Akiko Obuchi***

理事長挨拶

理事長
本庄 八郎 Hachiro Honjo

新年あけましておめでとうございます。財団の奨学生及び卒業生の皆様はどのような2021年を迎えられましたでしょうか。

昨年（2020年）は、世界中が新型コロナウィルスによるパンデミックの惨禍の年となってしまいました。新型コロナウィルスは2020年の新年早々に日本に上陸し、その後瞬く間に世界中に蔓延していきました。その経過は今まで人類が経験したことがない驚異の連続でした。この間、現役の奨学生の皆様は校内や研究室に立ち入ることができず、勉学や研究に様々な支障をきたしていることを大変危惧しておりました。しかしながら、在宅やオンラインで最大限の努力をして苦境を乗り越え、2020年秋に修了予定の方は全員予定通りに卒業されました。逆境に負けない皆様の強い精神力に敬服するとともに、無事卒業されました方には心よりお祝い申し上げます。

新型コロナウィルス蔓延防止のために、財団ではこれまで積極的に開催していたイベントをあきらめざるを得ませんでしたが、そのような中でもかねてより準備をしてまいりました高校生を対象とした奨学金プログラムを開始しました。厳正なる選考の結果、2020年6月に20名の高校2年生を奨学生として迎えることができました。24年の財団の歴史の中で最も若い奨学生です。高校生奨学生の皆様が、将来日本や国際社会でご自身の夢を実現されることを心より期待しております。

リアルに集まるイベントがまったくできませんでしたので、オンラインによる論文発表会や交流会をできる限り多く開催するようにしました。これまで海外在住や日本国内においても東京から遠い地域に在住の方には参加が難しかったイベントにオンラインで参加することが可能となりました。これもまた新しい生活様式の利点かもしれません。積極的に研究発表や講演やイベント企画をし、また参加してくださる皆様に心より感謝しております。新型コロナウィルスの蔓延が終息したあとには、これらの知恵と知識をもとに新しい交流活動を展開し、800名以上に及ぶ本庄ファミリーの交流の輪が一層広がれば幸いと存じます。

今年は東京オリンピック2020が開催されます。ちょうどその時に日本滞在中の方は、オリンピックの情熱を楽しんでほしい、海外在住の方もこれを機会に日本のことを周りの人に語って聞かせる機会にしてほしいと思います。

2021年の皆様の一層のご活躍とご健康を心から祈念いたします。

令和3年1月

財団の概要

【名　称】公益財団法人本庄国際奨学財団
【英文名称】Honjo International Scholarship Foundation
【行政庁】内閣府
【設　立】1996年12月25日
【理事長】本庄 八郎（ほんじょう はちろう）
【所在地】〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷1-14-9
【電　話】03-3468-2214
【ＦＡＸ】03-3468-2606
【E-mail】info@hisf.or.jp
【ＵＲＬ】https://www.hisf.or.jp
【目　的】
この法人は、学術研究への奨学援助および研究助成を行い、もって我が国と諸外国との教育・学術・文化における交流及び相互理解を促進するとともに、人材の育成及び教育・学術・文化の発展に寄与することを目的とする。

2021年度 奨学金・研究助成金の公募案内

外国人留学生奨学金（秋奨学金）

［募集期間］2021年4月1日～2021年4月30日
［募集人数］若干名
［募集対象］日本の大学院に留学する外国人留学生。
奨学金は9月または10月より支給開始します。

海外留学日本人大学院生奨学金

［募集期間］2021年2月1日～2021年4月30日
［募集人数］若干名
［募集対象］海外の大学院に留学する日本人留学生。
奨学金は9月または10月より支給開始します。

高校生・高専生奨学金

［募集期間］2021年2月1日～2021年3月31日
［募集人数］10名
［募集対象］日本の国公立高校または高等専門学校の1年生。国公立大学または専攻科（高専）に進学した場合は、大学または専攻科卒業まで奨学金を支給します。
奨学金は2021年4月分より支給します。

外国人留学生奨学金（春奨学金）

［募集期間］2021年9月1日～2021年10月31日
［募集人数］15名～20名
［募集対象］日本の大学院に留学する外国人留学生。
奨学金は2022年4月より支給開始します。

日本人大学院生奨学金

［募集期間］2021年9月1日～2021年10月31日
［募集人数］若干名
［募集対象］日本の大学院に在籍する日本人大学院生。
奨学金は2022年4月より支給開始します。

食と健康研究助成金

［募集期間］2021年9月1日～2021年10月15日
［募集人数］５～６名（総額1,000万円）
［募集対象］日本の研究機関で食品の健康に対する作用機序の研究に対する助成金。
2022年4月より助成します。

※募集期間等募集に関する詳細は、ホームページで公表します。
申請はインターネットによるWEB申請です。

春風荘便り

NEWS

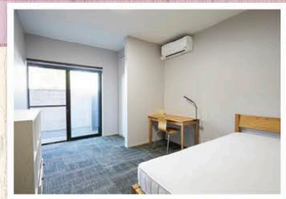
王子春風荘

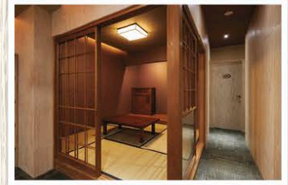
東京都北区王子の春風荘では、昨年まで駅伝大会に出場した後のパーティーや春風寄席を開催していましたが、2020年は新型コロナウィルスの感染防止のために、外部の人を入れる行事をほとんど行いませんでした。緊急事態宣言が発令された4月には、寮での共同生活においては特に注意が払われ、新しくルールを作って感染防止に注意を払いました。

東京の春風荘の自慢は立派な日本庭園です。どの季節にも花が咲き、とても美しいです。寮生や管理人のアンビカさんが季節ごとに丁寧に庭の写真を撮ってくれていますので、どうぞ春風荘の12か月をご覧ください。

京都春風荘

2020年4月に京都にも学生寮「京都春風荘」が完成しました。部屋は一階に男性用2室、2階に女性用3室、1階にはゲストルームが1室あります。京都の中心部から少し西側、堀川通の近くにあり、同志社大学今出川キャンパスに最も便利で、京都大学吉田キャンパスへも御所を横切っていくと自転車で20分です。京都への出張の際にはゲストルームが使えますので利用希望の際は事務局へご連絡ください。





寄付金の御礼

11期生のセバスチアン・オスカー・ダニエラチェさん（上智大学准教授）より20,000円の寄付をいただきました。後輩たちの奨学金のために、大切に使わせていただきます。ありがとうございました。

追悼

李好童（Lee Hodong）さん
2017年8月19日
20周年記念パーティーで

2020年2月22日、1997年度奨学生だった李好童(Lee Hodong)さんが、がんのために亡くなりました。55歳という若さでした。2017年夏に東京で開催しました20周年記念式典で卒業生代表として素晴らしいスピーチをしてくださいました。韓国同窓会では常に中心的な役割を果たしていただいておりましたが、2020年2月15日に開催の同窓会では連絡が取れず心配していました。同窓会から一週間後の突然の訃報でした。ユーモアにあふれ、決して自慢話をしない、とても優しい方でした。ここにご冥福をお祈りいたします。

José Kaname Ishitsukaさん
2017年8月20日
20周年記念シンポジウムで

1998年度奨学生だったJosé Kaname Ishitsukaさんが2020年11月16日にペルーで頭部挫傷の後遺症のために亡くなりました。60歳でした。東京大学で天文学の博士号を取得され、フアンカヨ天文台の台長であると同時にペルーの大学で後進の指導にもあたっていらっしゃいました。本庄国際奨学財団の運営が始まったばかりのころ、ホームページの創設やロゴの制作などをお手伝いいただきました。東大の駒場キャンパスのパソコンを刷新するときに古いパソコンを全部引き取ってペルーに送る作業をお手伝いさせてもらったこともあります。日本とペルーの二つの祖国のために全身全霊を捧げられた一生といっても過言ではありません。ペルーの物理学、天文学に寄与された功績は大きいとペルー地球物理学研究所のホームページに記載されております。ご冥福をお祈り申し上げます。

エッセイ①

教育が世界を救う

サンフォ モハマドウ バシル ジャンバディスト
SANFO Mohamadou Bassirou Jean-Baptiste, Ph.D.
（2018年～2020年　本庄国際奨学財団奨学生／ブルキナファソ）

2017年～2020年　神戸大学大学院国際協力研究科博士課程

ブルキナファソの教育

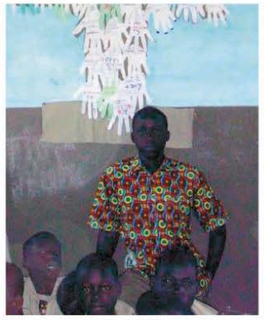
ブルキナファソは西アフリカの中ほどに位置し、四方を他国に囲まれています。発展途上国として知られており、教育開発に特に力を入れています。なぜなら教育は経済や社会の発展のためにとても重要な要素であるからです。

ブルキナファソの憲法第18条には、教育はすべての人が差別なく有する権利だと明記されており、それをさらに進めるべきだとしています。ですから教育はブルキナファソの最優先課題であり、この国に住む人々はだれでもどのような差別を受けることなく、教育を受ける権利を有するのです。

ブルキナファソの教育制度は、義務教育（基礎教育、中等教育、高等教育、職業訓練の専門教育）と非義務教育（15歳以上の大人のための非義務教育、9歳から15歳までの10代のための非義務教育、子供のための非義務教育）で構成されています。ほかにも非正規教育とされている教育（家庭内の教育、伝統や宗教に基づくコミュニティでの教育、日々の経験や社会グループによる教育など）と特化された教育（特別なニーズのために施される個人的な教育）があります。

ブルキナファソの教師、校長から日本の学生になる

私はもともとブルキナファソで中学校の教師と校長をしていましたが、日本の教育制度を勉強し、将来ブルキナファソの教育開発に活かそうと日本に留学しました。そのためにまず京都教育大学の研究生になりました。そこでは研究と社会生活両面において豊かな経験を積ませていただきました。研究面においては、日本とブルキナファソの中等教育の比較研究を行いました。その研究を通して発見したことは、日本とブルキナファソは経済的な格差は大きくとも、学校経営においてはお互いによく似た面がたくさんあるということです。たとえば、中学校と高等学校においては双方とも学校経営に携わる人たちがその職に就く前に訓練を受ける専門教育機関がありません。日本でもブルキナファソでも、学校経営に携わる人たちは、それまでの教師としての経験や学校経営に携わる初期のアシスタントとしての経験に頼るしかないのです。ところが、年功序列にこだわる日本では、校長は50歳以上の人がなることがほとんどである一方、ブルキナファソでは30歳代で校長になることは特別なことではありません。（私が校長になったのは27歳の時でした。）



ブルキナファソで私の生徒たちと

社会的な面においては、私は比較的早く日本語を習得できたので、日本の社会にすんなり溶け込むことができました。そしてこのことが、京都教育大学で研究を継続するモチベーションになり、さらには同志社大学で修士課程、神戸大学で教育開発の博士課程に進学することになりました。

神戸大学ではブルキナファソの金鉱掘削地域に住む子供たちの教育について研究をしました。ブルキナファソは現在、世界で有数の金の生産地として知られています。金の掘削には小規模経営者や職人が搾取される一面があり、地域住民や時には子供たちが巻き込まれることもあります。このような金鉱掘削は環境に悪影響を与えることは明らかですが、金鉱周辺に暮らす子供たちの教育にも隠れた悪い影響を与えます。たとえば、金鉱エリアに住む子供たちは学校をドロップアウトしてしまう率が高いのですが、これは簡単に労働対価を払ってもらえる仕事に子供たちが飛びついてしまうからです。私は子供たちが学校に行くために重要な要素は何かを見極め、彼らのテストの点数の改善に研究の重点を置くことにしました。子供たちの家族は子供たちが学校に行くことが大切だと思っている一方で、学校や教師はテストの点数をよくすることに重きを置いていることがわかりました。このことは家族が子供たちが学校へ行くかどうかをちゃんと監視できている事実から説明がつきます。しかし、多くの親たちは読み書きができないため、子供たちの家庭学習をサポートしたくてもどうすればよいのかわからないのです。

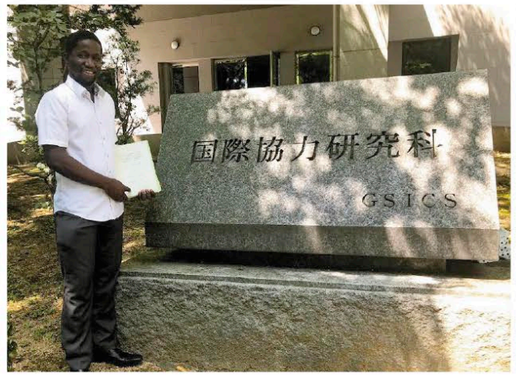
博士課程の時に、本庄国際奨学財団から奨学金をいただくことになりました。このことは経済的援助だけでなく、世界中から日本に勉強に来ている実に様々な出身の様々なバックグラウンドを持った人たちに出会えるチャンスを与えてくれました。違う国からやってきて違う環境で勉強する他の留学生とともに交流イベントに参加し、グローバライゼーションとはこういうことなんだと実感しました。この出会いのお陰で私は文化というものをもっと知ることになり、このような機会を与えてくださった本庄国際奨学財団に感謝しております。

もっと勉強を、でも社会に還元する時でもある

私は2020年9月に大学院を修了しました。もっと勉強を続けたい気持ちはありますが、これまで学んできた知識と経験を社会に還元することも必要だと思っています。私にできる最良で影響力の強い社会への還元とは、教育に関することです。ネルソン・マンデラ氏がとてもいい言葉を残しています。「教育は世界を変えるために使える最強の武器だ」と。私は教師としてのバックグラウンドを活かし、教育者としてこれからもこの道を歩んでいくつもりです。研究の世界に身を置いて大学で教えることを望んでいます。大学教授になって教育者としての私の情熱を追求すると同時に研究を続け、研究者としても有意義な日々を送りたいと考えています。

社会科学全般や特に教育について勉強しているまたはこれから勉強したいと思っている学生さんにはぜひ続けることをおすすめします。あらゆる研究分野において研究者は多かれ少なかれ自分の置かれた社会的な側面と協同しなければなりません。つまり社会学者は社会と科学の多くの面において意見を述べることができるのです。教育の勉強はあらゆる科学の交差点と言えます。公式、非公式にかかわらず、教育を経ることなく社会に生きる人は一人もいないからです。知識を得る道は長く終わりがありません。新しい道に足跡を残し、後輩たちが寄る辺とする道標を立て、世界がもっと良い場所となるように力を合わせて社会に貢献しましょう。

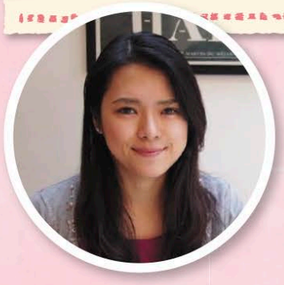
ブルキナファソの金鉱掘削現場での現地調査



大学院に博士論文を提出した日

エッセイ②

銀座のホステスは聴き上手？



代田 七瀬
Nanase Shirota, Ph.D.
（2016年～2020年　本庄国際奨学財団奨学生／日本）

慶應義塾大学大学院とグラスゴー大学大学院で修士号（社会学）取得
2020年ケンブリッジ大学大学院で博士号（日本研究）取得
文化人類学の視点で「聞く・聴く」の研究をおこなう。

銀座の高級クラブに潜入

東京銀座の夜八時。美しくアップに仕上げられた髪に厚手のコートをまとい、高いヒールをコツコツ鳴らし、早歩きで高級ナイトクラブに出勤する女性たちがいます。彼女たちはホステスと呼ばれ、主に男性客に対してお酒と会話を提供する仕事をしています。そのため彼女たちはよく「コミュニケーションのプロ」「よい聴き手」と評されます。何が彼女達をよい聴き手と言わせるのでしょうか。会話においてどのように振舞い、その振舞にはどのような意味があるのでしょうか。私は実際に銀座にあるClub 水野（仮名）で一緒に働き、参与観察とインタビューを実施しました。

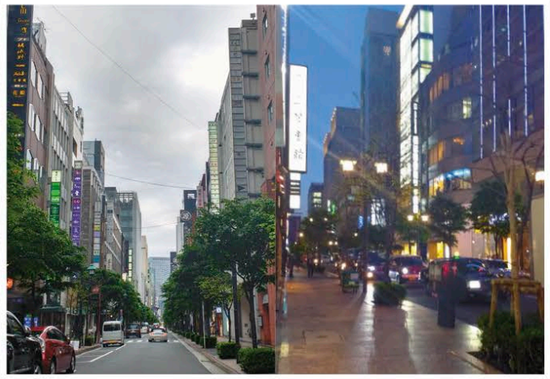
男性客とホステスの会話

ここでいう聴き手とは、決して受け身ではない、話す行為をする聴き手です。彼女たちは常に笑顔で、男性客の話に声を出して笑い、相手が話したくなるようなトピックを探し質問し、自慢話や苦労話に真摯に耳を傾け褒めてねぎらい、どんなにつまらない話題でもうまい合いの手で突っ込んだりボケたりして笑わせ、時に客をからかい、またからかわれ、自分も楽しんでいると演じます。自分のプライベートな話や意見を語ることもありますが、決して長々とストーリーや情報を語ったり、会話のスポットライトを奪ったりすることはありません。（時々、男性客は、実際はホステスが笑わせていても、自分が話の中心にいるので、自分がおもしろい話をしたと感じるようです。）出過ぎないけど引き過ぎず、ヒエラルキー（上下関係）のトップにいるお客の感情と欲求を読み取り（空気を読むということ）、言葉使いを敬語・方言・ため口・女言葉と自在に変え、チームワークと大げさなリアクションで盛り上げます。英麿（ひでまろ）という平安朝のイメージがある名前のお客には「蹴鞠（けまり）はお上手で？」とツッコミ、「今日は客が少ないなぁ。気の毒で帰り辛いよ」というお客には「今日は貸し切りにしたんですよねー？」とボケ、「お前、あの晩、濡れてただろ！」とからかう客には「そっちもたってたじゃん！」とチャレンジします。男性客達は「ベテランホステスは突っ込んでくるからおもしろい。」「この会話がおもしろくてくるんだよ」と言います。経験豊富な黒服は「褒めていい気分にさせるなんて誰でもできる。“会話でくすぐる” のがプロのホステスだ。」と言います。このような会話は、波長が合う、自分のことをわかってくれている、楽しむことも楽しませることもできて嬉しいという感情を呼び起こし、親密性と信頼性を高めるのだと考えられます。

ホステスの「聴く労働」

一方でコミュニケーションのプロといわれながらも、ホステスの仕事は「色恋営業」「疑似恋愛」などと表現され、女性らしさや色気、恋愛関係を売っていると思われているのも事実です (Allison 1996; Gagne 2016; Kawabata 1998, 2001)。しかし、これらは若い経験の少ないホステスの手法であったり（Matsuda 2008）、お客を引き寄せるための単なる最初のアピールであったり、常連客との表面的な「遊び」である場合がよくあります。では色気や恋愛関係以外に、男性客は何を求めにやって来て、ホステスは何を売るのでしょうか。一つの説は、日本の企業文化と親密に結びついた男性同士の絆を深めるためという解釈です（Allison 1996）。接待や部下のねぎらいで絆を深めにやって来る彼らは、ホステスの女性らしさ（男性であることを対象化させる物）と彼女たちのコミュニケーション力（会話をうまくつなぎ、リラックスさせ、からかいや話題の対象になる）を必要としています。もう一つの説は、特に個人の常連の男性客は（図らずも）信頼できる関係性を楽しみ、親密性を満たしに来るのだという分析です (Gagne 2016; Hōjō 2014; Matsuda 2008)。この解釈は、売春やストリップクラブに常連客としてくる男性客の分析でも「親密性の商品化」(commodification of intimacy) として理解されています (Bernstein 2010; Frank 1998; Koch 2020; Huff 2011)。銀座の高級クラブに来る常連客は、表向きは自身の経済力とヘテロセクシュアリティー（異性愛）を証明し、男らしさを再構築させて（いるように見え）、実は深い部分では、親しくなったホステスとの気の置けない関係や、互いに甘えられる親密で本物らしい関係によって満たされているのだと考えられます。私自身の観察においても、ホステスたちが親密で信頼できる関係性を構築するために努力・工夫をし、またその際に彼女たちが「よい聴き手」として振舞っていることを確認しました。

男性客は度々私に「ホステスは 聴いてるだけじゃん。楽な仕事だよね。」と言いました。果たしてそうでしょうか。彼女たちの労働はケアワークであり、感情労働(Hochschild 2012) であり、親密性の労働 (Boris and Parreñas 2010) であり、いやし労働 (Koch 2020) であり、エンターテイメント労働 (Parreñas 2010; Takeyama 2016) です。このような労働は女性たちが知らず知らず様々な場所で果たしてきた目に見えにくい、評価されにくい労働の種類です。そして、これらの労働に欠かせないスキルが聴くことです。聴くことは多くの女性が担ってきた労働の一種なのかもしれません。



昼間の銀座、クラブ街／夜の銀座、クラブ街

Club水野（仮名）、8時半の開店前

勤務最終日、フェアレルはドンペリ（シャンパン）で。

夜の3時に並木通りで屋台ラーメン。まだ勤務中です。

エッセイ③

タイにかける橋 ～ファラン※の一考

ジャスティン クレイマー
Justin Kraemer, Ph.D.
（2010年 本庄-JAA奨学生／カナダ）

2010年JAA-Honjo 奨学金受賞。ニュージャージー州立大学とラトガーズ大学で博士号を取得。
2019年1月よりタイ国チァンライ地方にあるMae Fah Luang大学ビジネス学部で講師を務める。

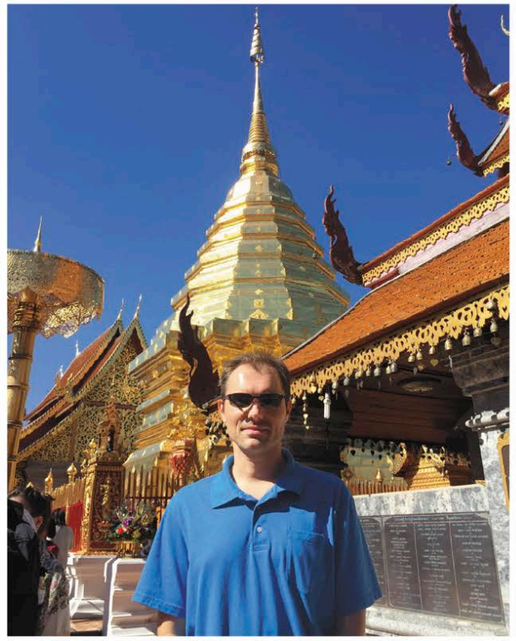
※ファラン（farang）はヨーロッパ系の人を指すタイ語の一般的な単語

はじめに ～タイに行くまで

本庄国際奨学財団から奨学金を授与されたのは残念なことに東日本大震災が起こった年でした。大震災の義援活動に奨学金を使うことが本庄国際財団への恩に報いることだと思いましたが、博士論文の執筆中に両親が他界したことも重なり、その思いは十分に達成することができませんでした。時を経て、私は日本人と外国人の間に立って人々に手を差し伸べることに専念するようになり、それが本庄国際奨学財団の理念にもっと添うことだと思いました。つまり懸け橋となって異国の人々を繋げることです。具体的にはX-cultureでボランティアをしたほかに、2019年1月からタイのMae Fah Luang 大学に勤め始めました。タイでの仕事は生活水準でいえば満足できる暮らしを送れていますが、それ以上に研究のために時間を確保することができたり、海外の人々と積極的に交流をする学生たちのお手伝いをできることが何よりも私にとっては重要です。この新しい仕事を通して本庄国際奨学財団の使命にふさわしい高度な研究を進めると同時に、異国の人々同士の良い関係構築にも寄与したいと考えております。

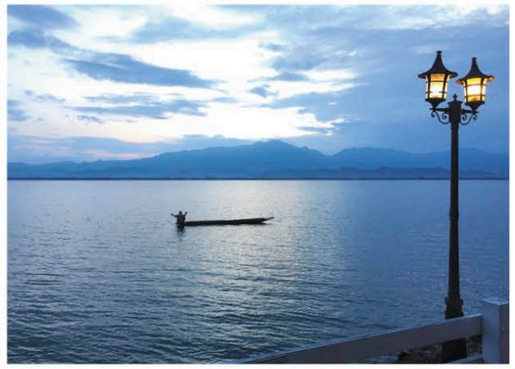
毎日が冒険！

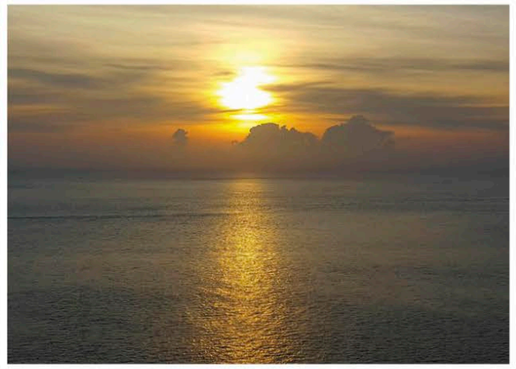
タイに住むことについては…冒険の連続です。日々驚きであふれています。良いこともあれば悪いこともあります。例えばここの気候は一年を通して、私の故郷カナダの夏よりも暑いのです。そしてこの暑さの中で繁殖する蟻や虫がたくさんいます。さらに、わたしは唯一キャンパス内のミニバスを利用する教師なので、学生たちがしきりに伝統的な習慣であるお辞儀（ワイ）をするのです。また、路肩で軽食やいろいろな食べ物を売っている屋台が信じられないくらいたくさんありますが、興味を持って冒険しすぎると体を壊すかもしれません。そして何よりも深刻なのは、英語とタイ語の障壁です。しかしここの人々は誰しも思いやりにあふれ、勤勉です。タイの人は体型も肌の色も志向もさまざまです。事実、タイの人は他人と交流することが好きで、その際、まったく先入観を持ちません。これがこの社会の特徴です。このことを私はほかの国の人々にもぜひおすすめしたいです。



西洋の目で見る

私がこの国を観察するやり方は明らかに「西洋の目」ですが、ここには時代遅れの規則や政策や手順がとてもたくさんあって、才能あるこの国の人々はそれらに従わなければならず、そのことは人々が持っている能力を最大限生かすことを妨げていると思います。また、他の文化や国でも当たり前のことですが、国籍などは関係なく、奇妙で自分勝手な人間は樽をダメにする悪いリンゴになりえる、つまり全体に悪影響をあたえることになるのです。そして最後にこれは私の専門ではありませんが、大気汚染公害について日本はすでによく解決してきたように見受けられますので、日本とタイがお互いの知識を交換すれば、タイの焼き畑農業から発するひどい空気の汚染を減らすことに大きな影響をもたらすことができるのではと考えます。





よろしくお願いします！
第1期高校生奨学生です！

令和2年春から高校生奨学金制度がスタートしました。国公立大学に進学した場合には月額50,000円の奨学金が大学卒業まで継続することが、このプログラムの特徴です。全国の高等学校で大学進学を目指して勉強やクラブ活動や校内活動に一生懸命な元気いっぱいの高校生を、本庄ファミリーにあたたかく迎えてください！

高校所在地で
北から順に紹介します。

★学校名・学年、名前
★部活や校内活動
★ひとこと

※プロフィールのイラストはイメージです

北海道立寿都高等学校普通科2年　後藤 風海

バドミントン部

私の将来の夢は高校の英語教師になることです。私は幼い頃から漠然と「学校の先生になりたい」と考えていました。その考えは変わらず、今は英語をたくさんの人に教えたい、進路や将来について悩む人を支え、より良い道へと導いてあげたいという思いを持っています。
高校卒業後、大学に進学し、英語や教育について学びたいと考えています。そして、多くの人から慕われる教師になりたいです。

秋田県立秋田高校普通・理数科2年　佐々木 うらら

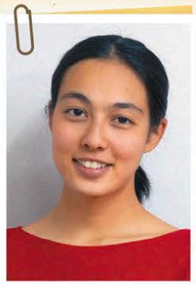
入学当初から軽音楽同好会に所属しています。同じ学校の4人のメンバーと楽しくバンド活動を続けており、現在は曲の制作と県内高校生のバンドコンテストに向けた練習に取り組んでいます。また今年の夏からJRC同好会に入り、国際問題への理解を深める活動やボランティア活動に参加しています。

趣味はギター演奏、絵を描くこと、スイーツ作りです。どれも素人ですが上達を目指しています。得意な科目は英語で、力を伸ばすために弁論やディベートの大会に応募するなどして頑張っています。将来海外で十分仕事ができるよう、ビジネスレベルの英語を目指していきたいです。そして今回一期生として選んで頂けたことへの感謝を胸に、勉強もその他の活動も、全力で取り組んでいきたいと思います。

宮城県立古川黎明高等学校普通科2年　佐々木 美琴

部活は吹奏楽部でトランペットを吹いています。
現在はアンサンブルコンテストに向けてグループで練習をしています。

将来の夢は高校の数学教員になることです。理解しやすく教えるのはもちろん、数学の魅力や楽しさも伝えられる教員になりたいと考えています。自分の目指す教員になれるよう、まずは第1志望校合格を目標として、今後も勉学に励んでいきます。



群馬県立沼田女子高等学校普通科2年　塩野 怜玲

私は現在、決まった運動部には所属しておりませんが、時々頼まれた時に、助っ人選手として、サッカーやテニスの試合に出たりしています。部活動に所属していない分、スピーチコンテストなどに出場して結果を出せるように日々努力しています。

私が住んでいるみなかみ町は、四季の自然と綺麗な空気があり、様々な野生動物と遭遇する事が出来ます。そんな自然の中で育ったので、私は自然の中で遊ぶことが大好きです。得意な教科は英語です。将来は国際公務員になるのが目標です。そして恵まれない子供達の救済に取り組みたいと考えています。今の私にはまだまだ不足している部分が沢山ありますが、日々努力していきたいと思います。
皆さん、これからもよろしくお願いします。

埼玉県立入間向陽高等学校普通科2年　Y. F.

クラスでは中央委員会として活動しています。様々な学校行事の実行委員をサポートしたり、生徒会と連携をとりながら学校を良くするように話し合ったりしています。
部活では女子サッカー部として活動しています。先日あった選手権大会では関東大会出場を目指して努力しました。部活内ではうまくいかないことも沢山あって、何度もみんなで話し合ったりしながら団結して試合に挑めました。望んだ結果とはなりませんでしたが、これをバネに次の大会に向けてみんなで練習に励んでいます。

最近の趣味は読書することです。読書をすると心が落ち着いて、さらに本のおかげで多くのことを学べることが実感できて日常で役に立つと楽しくなります。読書は充実した生活に欠かせないと思っています。自分は将来やりたい仕事があまりはっきりしていませんが、自分をサポートしてくれる人たちに恩返しができるように自立していきたいと思っています。

埼玉県立浦和第一女子高等学校普通科2年　相良 知美

SSH（スーパーサイエンスハイスクール）

趣味は、音楽を聴くことです。演奏することも好きで、中学時代は吹奏楽部に所属し、トロンボーンを吹いていました。高校では、SSHに所属しています。
現在、「コダカラベンケイソウのカルス誘導における天然物の促進効果」をテーマに研究を進めています。
よろしくお願いします。

神奈川県立住吉高等学校普通科2年　森川 蓮

野球部部員、庶務係

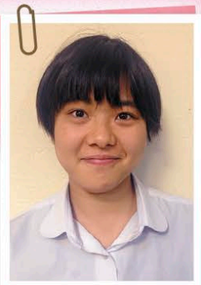
好きなことは体を鍛えたり友達と話すことです。得意な教科は社会科科目全般です。
将来は自分が得意な社会科の知識やコミュニケーション能力などを生かして教員になりたいと考えています。

山梨県立甲府昭和高等学校普通科2年　花輪 あすか

私は高校ではダンス部に所属しており、ダンスが好きな仲間達とレベルの高いパフォーマンスを目指して、毎日一生懸命練習しています。また、文化祭・地域のイベントなどで踊らせてもらっています。

私の趣味は音楽と映画鑑賞です。好きなことには没頭する性格でいつも時間を忘れてしまいます。
私は将来、誰からも愛される保育士になりたいと思っています。夢を叶えるために毎日勉強を頑張っています。
また、私の住んでいる地域は自然豊かで八幡芋が特産品です。

兵庫県立神戸商業高等学校情報科2年　津崎 優希



卓球部

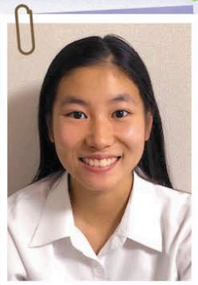
私は現在神戸商業高校に通っていますが、そこでは普通科の高校では学ばない科目を受け、ほぼ毎月ある検定と、その勉強で日々追われています……とても難しい内容のものが多いですが、その分、とてもやりがいがあり、目標を持って勉強に取り組むことができます。
私は高校卒業後大阪の大学に行きたいという目標もあるので、2年次に取ることのできる全ての検定を取得できるよう頑張ります。

国立奈良女子大学附属中等教育学校普通科2年　小澤 二子

私は、SSH化学班に所属しており、コーヒーによる水中の重金属イオンの捕集除去について研究しています。実は、コーヒーに含まれるポリフェノールや繊維に、重金属イオンを吸着する力があるんです!私は文系で、もともと化学に苦手意識があったのですが、この研究が楽しくて研究者になりたいという新たな夢ができました。

味は刺繍をすること、相撲やサッカーなどスポーツを見ることです。スポーツは、見ることも好きですがやることも好きで、好きなサッカーチームを応援しているうちに自分もやりたくなって、女子サッカー部を作ってしまいました!

高松市立高松第一高等学校普通科2年　多田羅 里梨



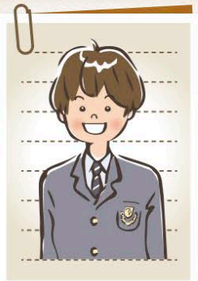
私は中学校から剣道をしています。中学校の部活動見学の時に初めて剣道競技を見て、緊張感あふれる攻防や、キレのある技の一つ一つに魅了されて、剣道部に入りました。
また、私の夢は警察官になることなので、剣道で培った技術は将来にも生かされると思っています。
学習面も大変なことが多いですが、文武両道で頑張りたいと思います。

私の趣味は読書です。本を読むと自分の知らないことを知れたり、教訓を得たりでき、自分の世界が広がるからです。特に心に残っている小説の言葉は、「自分の選択に間違いはない。間違いだと思うなら、自分の力で『正解』に変えていけばいい」です。この小説を読んでから、私は物事をポジティブにとらえるようになりました。これからも色々な種類の小説に挑戦して、自分の世界を広げていきたいです。

高知県立幡多農業高等学校アグリ科2年　岡井 来夢

私は、高知県西部に位置する農業高校に通っています。授業では、国語や数学などの普通教科以外に、作物や畜産など農業に関する科目を学習しています。また、実習では、米やイモなどの作物の栽培、牛や豚、鶏などの家畜の飼育と管理、またそれらの肉を用いた食肉加工を行っています。部活動には所属していませんが、課題研究や受験勉強に力を入れて活動しています。

私は、中学生のころ音楽部に所属しており、音楽を聴くことが好きです。今は『THE ORAL CIGARETTES』というバンドが好きで、よく聴いています。得意な科目は数学と理科で、将来は農学部に進学し、農業高校で培った経験を生かして、農学研究に携わりたいと思っています。



大分県立大分西高等学校総合科2年　阿部 光志

部活動 バドミントン、学校活動 副HR長

私の通っている高校は、進学系総合学科の学校です。そのため、生徒一人一人の適性に合った科目を受講することができ、将来の夢に近づけてくれます。
私はプログラマーになるために、理系コースに進み、特に理系科目の学習に力をいれています。

熊本県立熊本高等学校普通科2年　堀田 稜斗

将棋部

好きな科目は物理ですが、宇宙物理学、原子核物理学、脳科学、遺伝学、生命の進化、歴史学、哲学など幅広いことに興味があります。
大学で、意義深く興味深い充実した研究をできればいいなと思っています。
よろしくお願いします。

熊本県立熊本高等学校普通科2年　畑中 愛梨

物理部、化学部

今は化学電池、ダニエル電池について研究しています。
いつでも使えるような、より簡単に作ることができて持続性が高い電池を開発していきたいです。

沖縄県立球陽高等学校理数科2年　徳元 陽菜

SS生物クラブ（オガサワラゴキブリの研究）

みなさん、はじめまして!将来は、総合診療医として、僻地の医療体制を整え、みんなが安心して暮らせる社会づくりをしたいです!! 今は、高校生だからこそ、できる社会貢献活動に力を入れています。
みなさんとお話しできる日を楽しみにしています!

沖縄県立那覇国際高等学校国際科2年　仲宗根 七海

ダンス部キャプテン

私は現在那覇国際高校ダンス部「Stajaker」のキャプテンを務めています。部員数は1, 2年合わせて60名と大人気の部活です。キャプテンに決まったとき、最初は「こんな大役、私に務まるのか」と、とても不安でした。また、今年はコロナの影響もあり、思うようにダンス部としての活動ができないでいました。しかし、そのような状況下でも、部員同士が協力し合い、先日は「ガクアルFESTA」という大会で3位という成績を残すことができました。私たちにとっては初めての「賞」でとても自信につがなりました。現在は1月に開催される「DANCE STADIUM」という大会に向けて日々練習に励んでいます。Stajakerらしい演技で輝かしい成績を残せるようにこれからも頑張っていきます!

同窓会を開催しました

韓国同窓会

2020年2月15日(土)
ソウル市 レストラン「オバルタン」(Obaltan)

韓国では新型コロナウィルスが日本より一足早く流行の兆しを見せ、日本でも海外旅行を自粛する動きが出始めた頃でしたが、島国日本では水際対策ができるはずだとまだ思っていたこともあり、韓国の皆様の大歓迎に甘えて、ソウル行きの飛行機に乗りました。金浦空港で出迎えてくれた河東賢(Ha Donghyun)さんが最初に手渡してくれたのはマスクでした。そのあと日本でマスク不足になるとは思いも寄りませんでした。日本から先に帰国して待ってくれていた李和貞(Lee Hwajeong)さんも合流してホテルに入り、ソウル市内の海鮮市場や漢江沿いを歩きました。漢江では雪もちらついて、冷たい風が吹いていましたが、漢江の公園でカササギをたくさん見て、「何かいいことがあるかな～」と思っていました。韓国では日本のカラスのように町中にたくさんいるカササギですが、日本のカラスより小さくて色もきれいで、かわいらしい。それに韓国ではカササギは幸運を呼ぶ鳥といわれているそうです。夕方にはもちろんたくさんの懐かしい韓国の本庄ファミリーに会えたわけですが。

同窓会では李和貞さんと鄭宜珍(Jung Uijin)さんが工夫を凝らした準備と進行をしてくださったお陰で、大変楽しく賑やかな同窓会となりました。久しぶりにお会いした廉正烈(Yeom Jungyeol)さんと李範揆(Lee Bumkyu)さんは、「日本語を使わないから忘れました」と流暢な日本語で話してくれました。

同窓会のクライマックスは、予期せぬ形で現れました。1期生の洪炳喆(Hong Byungchul)さんが本庄竜介常務理事にただ渡そうとした奥様からの手紙を、みんなの前で読むことになりました。その手紙の内容は、留学当時、本庄正則理事長と洪炳喆さんが伊藤園ビルの会長室で奨学金の面接をした後、会長は洪炳喆さんの自宅へ電話をかけて、奥様とお話をしたそうです。とても苦労をして日本留学を果たし、その最中も本人も家族も苦労がまだ続いているが、奥様がしっかり支えてあげなければいけない、という正則会長の激励でした。それがあったこそ夫の留学が貫徹できたことを奥様は正則会長にお礼を言いたかったのですが思いがけず正則会長が亡くなってしまい、それを果たせず、竜介常務にその思いを託したのです。事務局も誰も知らない逸話でした。洪炳喆さんも手紙を読みながら当時の苦労を思い出したのでしょう、思わず涙があふれて、手紙を読む声も震えました。20年以上たって、留学生の生活も日韓関係も大きく変わりました。ただ一概によくなったとはいえず、一進一退、日韓関係は良くなったり悪くなったり、留学生の生活は楽な人もいれば、数十年前と変わらず苦学をしながら留学生活を送る人もいるでしょう。心を支えることはとても難しいことですが、故本庄正則氏が韓国の元留学生を通して、20年以上たった今改めて、あたたかく広い気持ちで留学生たちをサポートすることを忘れてはいけないと、諭してくれているようで、輪廻というのか、人の力を越えた広大な宇宙に存在していることを感じました。しかしそう感じたのは洪炳喆さんの逸話が初めてではなく、韓国留学生の一人一人の留学の思い出を聞くたびに、その不思議な宇宙からの故本庄正則会長の声を聴くような気がするのです。

NY同窓会

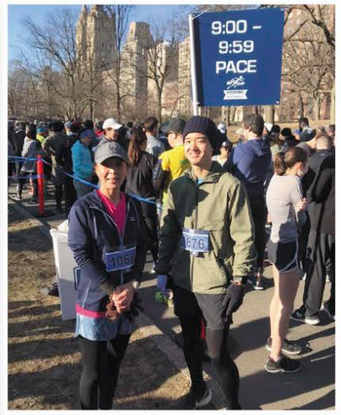
2020年2月19日(水)
ニューヨーク Japan Society

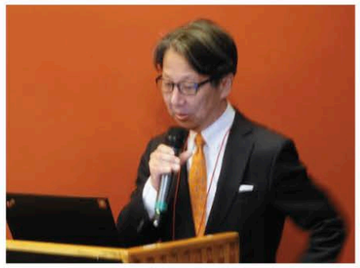
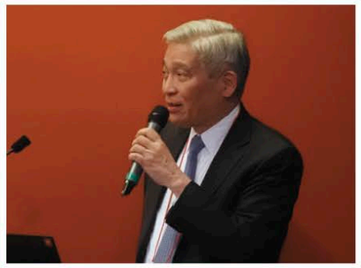
米国やカナダにいる卒業生や現役奨学生との交流会を開催するために、ソウルから直接ニューヨークへ飛びました。新型コロナウィルスは世界に徐々に広がりを見せていましたので、長時間の機内では緊張感がありました。あの頃はまだマスクをつけることに抵抗がありましたので、感染の心配は少しあったもののマスクはほとんどつけなかったのではと思います。今からは考えられません。ニューヨークでは、アジアを震源とする未知のウィルスということでアジア系の人が暴力を振るわれる事件が少し報道されていましたが、行きかう人々にマスクをつける人は皆無で、むしろマスクをつけていると嫌がられそうでした。

日本から休暇をとってきてくれた西原拓未(Takumi Nishihara)さんとカナダ在住の五十嵐敬幸(Hiroyuki Igarashi)さんのヘルプとITOEN(North America)のTrace Otsukaさんの滑らかな司会進行のおかげで、Japan Societyで同窓会は無事に開催されました。長い間メールの交換だけの知り合いだったJAA, JMSA, CSSWの関係者や奨学生の皆様に直接お会いできたことに大変感激しました。JAAのGary Moriwakiさん, JMSAの本間俊一先生、CSSWのJeannette Takamura先生から熱いスピーチを頂戴しました。ITOEN(North America)のYosuke J. Oceanbright社長の手慣れたおもてなしのお陰で、ニューヨークにありながらこじんまりとしてアットホームで、日本的な会合をもてたことは、長く日本を離れている方々にとって日本を懐かしむ時間となったのではないでしょうか。またここにも様々な分野で活躍する優秀な研究者や医師が大勢本庄ファミリーの一員としていらっしゃることが確認できましたので、より緊密な「関係と交流を継続してまいりたいと思います。

翌日にはCSSWのJeannette Takamura先生の特別の計らいでメトロポリタン美術館を案内していただき、またその翌日には、コロンビア大学に留学中の鈴木謙介(Kensuke Suzuki)さんとセントラルパークハーフマラソン大会を走りました。皆様の温かいおもてなしに心より感謝しております。

ニューヨークから帰国してわずか１週間ほどで、ニューヨークでも新型コロナウィルスが大流行し、国際線は徐々に閉鎖され、あっという間にもう震源地の中国武漢だけの問題ではなくなりました。そしてJapan Societyで会った、多くの医師の先生方は新型コロナウィルスの患者さんの対応に忙殺されることになり、コロンビア大学の島田悠一さんやマウントサイナイ医科大学病院(Mount Sinai Hospital)のRobert Yanagisawa先生を、日本でもテレビやインターネットニュースで、ニューヨークの感染状況や医療体制を報告する医師として見かけることになりました。医療関係の皆様の命がけの闘いは一年近くたった今でも続いており、心より感謝申し上げる次第です。



1年間の活動

HISF Annual Activities

2019年4月～2020年3月
April, 2019 - March, 2020

1 北区赤羽マラソン
Akabane Marathon

2019年4月13日(土) April 13, 2019

北区赤羽マラソンの20キロリレー（5キロ×4人）に3チームが参加しました。3チームとも見事に完走しました。

We had run successfully the Akabane Marathon 20 Kilometers Relay.

2 博士論文発表会
Doctoral Dissertation Presentation Program

2019年5月19日(日)
May 19, 2019

2018年4月~2019年3月までに学位を取得した3名による博士論文発表会を開催しました。

Doctoral dissertation presentation program was held with 3 presenters, who graduated during April 2018 to March 2019.

マーク・クリスチャン・マニオ
Mark Christian C. Manio

ピッシャヤナン・スワンモントリー
Pichayanun Suwanmontri

岩上 将夫
Masao Iwagami

3 北区赤羽マラソン＋春風寄席
Akabane Marathon & Shunpu-Yose

2019年6月8日(土) June 8, 2019

今年度2回目北区赤羽マラソンの20キロリレー（5キロ×4人）に3チームが参加しました。3チームとも見事完走です。マラソンの後は春風荘にて春風寄席（落語）を実施しました。近所からも多く参加してくれて盛り上がりました。

We had run successfully the Akabane Marathon 20 Kilometers Relay 2nd time in 2019. After Marathon we had organize Shunpu-Yose (Rakugo) at Shunpuso. Many neighbors participated to cheer up us.

4 静岡研修旅行
Shizuoka Trip

2019年6月14日(土)～15日(日)
June 14-15, 2019

伊藤園の浜岡工場、中央研究所、ペットボトル飲料製造工場を見学しました。今回はラフティングに挑戦しました。

We had visited and observed Central Research Institute, Hamaoka Plant and PET bottle beverage manufacturing plant of Itoen. This time we enjoyed Rafting too.

5 第15回ワークショップ
HISF Workshop Vol. 15

2019年7月6日(土) July 6, 2019

『カリウムは熱いうちに打て！～次世代の新しい機能材料を探る～』
講師：マセセ・タイタス・ニャムワロ

Lecture by Dr. MASESE Titus Nyamwaro on "Strike Potassium While It Is Hot! ～Now functional material for the next generation～"

6 東北研修旅行
Tohoku Water Distribution Volunteer Excursion Tour

2019年9月21日(土)～22日(日)
September 21-22, 2019

岩手県立大学とオハイオ大学と共同で東日本大震災復興支援ボランティア活動を行いました。鮭の孵化場の掃除もお手伝いしました。

Iwate Prefectural University, Ohio University and Honjo International Scholarship Foundation jointly organized Water distribution volunteer program to assist restoration from the Great East Japan Earthquake. We also volunteered to clean the salmon hatchery pond.

7 北区赤羽マラソン＋春風寄席
Akabane Marathon & Shunpu-Yose

2019年11月9日(土) November 9, 2019

今年度3回目北区赤羽マラソンの20キロリレー（5キロ×4人）に3チームが参加しました。今回も3チームが無事に見事完走しました。前回同様、今回もマラソンの後は春風荘にて春風寄席（落語）を実施しまして、近所からたくさんの方々が参加してくださいました。

We had run successfully the Akabane Marathon 20 Kilometers Relay 2nd time in 2019. After Marathon we had organize Shunpu-Yose (Rakugo) at Shunpuso inviting the neighbors.

8 第16回ワークショップ
HISF Workshop Vol. 16

November

2019年11月17日(日) November 17, 2019

『食情報のウソ?ホント?! ～栄養疫学が見抜く～』
講師:児林 聡美
Lecture by Dr. Satomi Kobayashi on "Using nutritional epidemiology to reveal the truth and lies in food related information"

9 食と健康研究成果報告会
A Seminar of Food and Health Research Fellowship Program

December

2019年12月6日(金) December 6, 2019

食と健康研究助成金受賞者による研究成果報告会を開催しました。
Research grant awardees presented their results on "Food and Health" research.
in USA participated to confirm the reunion.

木村 純子先生 Junko Kimura

早田 邦康先生 Kuniyasu Soda

橋本 健志先生 Takeshi Hashimoto

矢野 友啓先生 Tomohiro Yano

横井 秀基先生 Hideki Yokoi

10 忘年会
The Year-End Party

December

2019年12月26日(木) December 26, 2019

今年も大相撲初場所升席と歌舞伎のチケットを用意し、総合研究大学院大学の大平元希さんによる「スペースクイズ」を実施しました。
"The Space Quiz" made the environment of the party more special performed by Mr. Genki Ohira from SOKENDAI.

11 韓国同窓会
Alumni Meeting in South Korea

February

2020年2月15日(土) February 15, 2020

韓国で同窓会を開催し、韓国出身のOB/OGが旧交を温めました。
Alumni reunion was held in South Korea. The alumni from South Korea gathered and reconfirm their union.

12 NY同窓会
Alumni Meeting in New York

February

2020年2月19日(水) February 19, 2020

アメリカでも同窓会を開催しました。アメリカ周辺にいるOB/OGが参加してくれました。
Alumni reunion was held in United States of America. The alumni residing in USA participated to confirm the reunion.

Greetings from the President

President
Hachiro Honjo

Happy New Year! I hope all students and graduates of the Honjo International Scholarship Foundation enjoyed welcoming in 2021.

Unfortunately, last year was a terrible year due to the COVID-19 pandemic. The virus arrived in Japan early in 2020, and soon after it spread around the world in a blink of an eye. The events were unlike anything we have experienced before in recent human history. I have been deeply concerned to learn that, during this time, current scholarship students have been unable to enter their school campus or laboratory and have been facing numerous difficulties in their studies and research activities. However, everyone did their best to study at home and through remote learning, and all of the students that were scheduled to complete their education in September successfully graduated. I have great respect for their strong spirit and determination to overcome adversity and would like to congratulate all of the successful graduates.

In order to prevent COVID-19 from spreading, unfortunately we had to forego the events that we had been actively holding before. However, even under these circumstances, a high school student scholarship program that has been in its preparation phase was successfully launched, and we welcomed 20 young high school sophomore students in June 2020. They are the youngest scholarship students in the 24-year history of our foundation. I truly hope that these high school scholarship students will achieve their dreams in Japan and overseas in the future.

Because we were unable to hold any events at which people can actually gather together, we tried to hold as many online dissertation presentations and social gatherings as possible. Because the events were online, it was also possible for people that are usually unable to attend, such as those living overseas or in Japan but far from Tokyo, to join the events. This could be another benefit of the "new normal." I would also like to express my sincere gratitude to everyone that actively participated in the planning of the research presentations, lectures, and other events. After the pandemic comes to an end, I would like to expand new exchange activities utilizing these ideas and knowledge in the hope that exchanges involving over 800 members of the Honjo family will grow even further.

This year, the Tokyo 2020 Olympic Games will be held. I hope that all people in Japan at that time can enjoy the excitement of the Olympics, and I ask those that are residing overseas to take advantage of this opportunity to talk about Japan to the people around you.

I wish you great health and success in 2021.

January 2021

Overview of the foundation

[Name] Honjo International Scholarship Foundation
[Overseeing Authority] Cabinet Office, Government of Japan
[Date of Establishment] December 25, 1996
[President] Hachiro Honjo
[Purpose]
Honjo International Scholarship Foundation has been established to support outstanding students and researchers. To help them learn advanced technologies and improve their good intensions will serve as a bridge connecting Japan with the rest of the world in culture and mutual friendships.

[Address] 1-14-9 Tomigaya Shibuya-ku Tokyo 151-0063 JAPAN
[TEL] 03-3468-2214
[FAX] 03-3468-2606
[E-mail] info@hisf.or.jp
[URL] https://www.hisf.or.jp

Guideline for Scholarship and Research Fellowship in 2021

Scholarship for foreign students studying in Japanese graduate school (Fall scholarship)

[Application period] April 1st, 2021 ~ April 31st, 2021
[Number of Scholarships available] A few
[Applicants] This scholarship is open to foreign students who study or plan to study in Japanese graduate school for doctoral or master's degree.
The scholarship period starts at September or October 2021.

Scholarship for Japanese International Students

[Application period] February 1st, 2021 ~ April 30th, 2021
[Number of Scholarships available] A few
[Applicants] This scholarship is open to Japanese graduate students who study or plan to study in other countries than Japan for doctoral or master's degree.
The scholarship period starts at September or October 2021.

Scholarship for High School students and National College of Technology students

[Application period] February 1st, 2021 ~ March 31st, 2021
[Number of Scholarships available] 10
[Applicants] We support Japanese High School students and Japanese National College of Technology students with difficulty to have higher education at university or advanced course.
The scholarship period starts at April 2021.

Scholarship for foreign students studying in Japanese graduate school (Spring scholarship)

[Application period] September 1st, 2021 ~ October 31st, 2021
[Number of Scholarships available] 15~20
[Applicants] This scholarship is open to foreign students who study or plan to study in Japanese graduate school for doctoral or master's degree.
The scholarship period starts at April 2022.

Scholarship for Japanese Domestic Students

[Application period] September 1st, 2021 ~ October 31st, 2021
[Number of Scholarships available] A few
[Applicants] This scholarship is open to Japanese students who study or plan to study in Japanese graduate school for doctoral or master's degree.
The scholarship period starts at April 2022.

Food and Health Research Fellowship

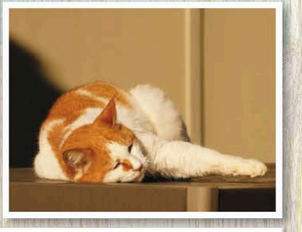
[Application period] September 1st, 2021 ~ October 15th, 2021
[Number of Scholarships available] Total of ten million JPY will be divided by approximately five researchers.
[Applicants] We support research to clarify the efficiency of food or ingredients of food in order to maintain good health by means of experimentation on human subjects or by various other substitution methods.
The research grant is provided from April 2022.

※We will announce the fixed schedule and details on our web site. The application is through web internet system.

Letter from Shunpu-So

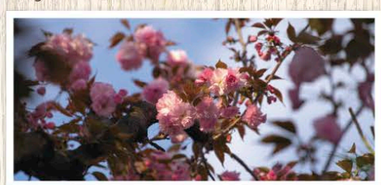
NEWS

Oji Shunpu-so



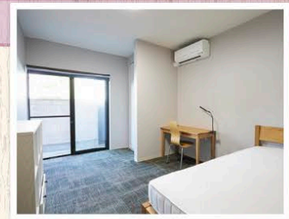
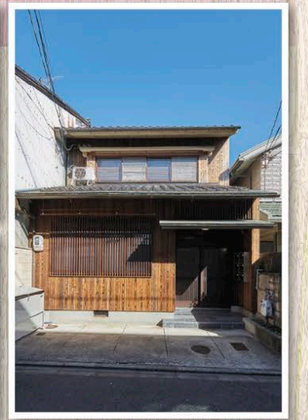
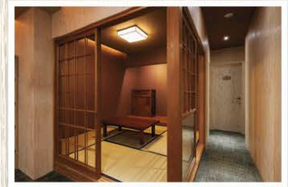
At Shunpu-so, located in Oji, Kita-ku, Tokyo, parties after the Ekiden race and Shunpu-Yose were often held, until last year. However, almost no events were held with people from outside the dormitory in 2020, in order to prevent the spread of COVID-19 infections. When the state of emergency was declared in April, particular attention was paid to communal living in the dormitory, and new rules were created to prevent infection.

Shunpu-so in Tokyo is proud of its magnificent Japanese garden. Beautiful flowers bloom every season throughout the year. The residents and the caretaker, Mrs. Ambika Shrestha, have taken wonderful pictures of the garden each season. At Shunpu-so, please feel free to enjoy the photos of the garden's scenery as shot by Mrs. Shrestha, as it is nice to feel the garden's embodiment of the four seasons.



Kyoto Shunpu-so

In April 2020, the Kyoto Shunpu-so student dormitory was completed in Kyoto. The first floor has two rooms for men, the second floor has three rooms for women, and there is a guest room on the first floor. It is located near Horikawa Street, slightly west of central Kyoto. It is very convenient for going to the Imadegawa Campus of Doshisha University, and if you cross the Kyoto Imperial Palace, it takes only 20 minutes to get to the Yoshida Campus of Kyoto University by bicycle. The guest room is available for those on business to Kyoto, so please contact the secretariat if you would like to stay there.

Thanks for the donation!

The 11th-generation scholarship student, Dr. Sebastian O. Danielache (associate professorat Sophia University),donated 20,000 yen to the foundation. We will make sure that it will be used for future scholarships. Thank you very much.

Obituary

Dr. Lee Hodon
at the 20th anniversary party in August 19, 2017

On February 22, 2020, Dr. Lee Hodong, a scholarship student in 1997, died of cancer. He was only 55 years old. At the 20th anniversary party held in the summer of 2017 in Tokyo, he gave a great speech as a representative of all former scholarship students. Dr. Lee always played a key role in the Korean reunions, but we were not able to contact him about the reunion held on February 15, 2020, and this made everyone worry. News of his death came suddenly only a week after the reunion. He had a great sense of humor, never bragged, and was always very kind. May he rest in peace.

Dr. José Kaname Ishitsuka
at the 20th anniversary symposium in August 20, 2017

Dr. José Kaname Ishitsuka, who was a scholarship student in 1998, died on November 16, 2020 from complications following a head injury suffered in Peru. He was 60 years old. After obtaining a doctorate in astronomy from the University of Tokyo, he worked as the director of Huancayo Observatory and also taught young astronomers in Peru. Early after the founding of the Honjo International Scholarship Foundation, he helped us with creating the website and logos. When the University of Tokyo replaced its computers at Komaba Campus, we helped him with picking up all the old computers and sending them to Peru. It is no exaggeration to say that he devoted his heart and soul to his home countries of Japan and Peru. According to the Instituto Geofísico del Perú website, Dr. José Kaname Ishitsuka made an enormous contribution to the development of physics and astronomy in Peru. May he rest in peace.

Essay ①

Reaching out to the world with education

SANFO Mohamadou Bassirou Jean-Baptiste, Ph.D.
(2018~2020 HISF scholarship awardee / Burkina Faso)

2017~2020 Graduate school of International Cooperate Studies in Kobe University
2018~2020 Honjo International Scholarship awardee

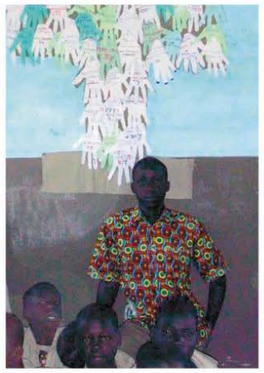
Education in Burkina Faso

Burkina Faso is a country located in the middle of West Africa, making it a landlocked country. It is known as a developing country, and it has been putting much efforts into the development of its education, since the latter is an important factor of economic and social development. The constitution of Burkina Faso in its article 18 recognizes education as a right for everyone without any types of discrimination and expresses the need to promote it. Subsequently, education is a national priority and anyone living in the country has a right to education without any type of discrimination.

The educational system in Burkina Faso is composed of a formal education (basic education, secondary education, higher education, and technical vocational education and training) and a non-formal education (non-formal education of youth and adults over fifteen years old, non-formal education of teenagers from nine to fifteen years old, and non-formal childhood education). There is also one type of recognized informal education (education acquired through channels like the family, traditional or religious communities, daily experience, social groups etc.) and specialized education (education of individuals with special needs etc.).

From a teacher and school principal in Burkina Faso to a student in Japan

Originally a teacher and school principal in a junior high school in Burkina Faso, I came to Japan to learn about Japanese educational system and hopefully find some aspects that can be used for educational development in Burkina Faso. For this purpose, I was a research student in Kyoto University of Education (KUE). My experience as a student from KUE was enriching, from an academic perspective and a social one. From the former, I was able to conduct a comparative study on secondary school management in Japan and Burkina Faso. From this research, I found that even though the two countries are economically very different, there are many education dimensions they share in terms of school management. For example, for junior high and high schools, there is no professional training school where school managers are trained before they start their management job. School managers from both countries have to rely much on their previous experience as teachers or assistant managers from the early moments they become school managers. However, my research found that due to the seniority system that strongly prevails in Japan, most school managers are in their fifties, while in Burkina Faso it is not surprising to see a school manager in his/her thirties (I became a principal at the age of 27). From the social perspective, I was able to acquire Japanese language relatively fast and also build a network, allowing me to adapt to the realities of living in Japan. This experience gave me the motivation to continue studying after KUE, leading me to a Ph.D. in education development at Kobe University (KU) after also completing a master's degree program at Doshisha University.



With my students in Burkina Faso

At KU, my research focused on the education of students from gold mining areas in Burkina Faso. Burkina Faso is currently among the biggest producers of gold in the world. The mining sector also includes a small-scale/artisanal exploitation type, which directly involves local populations and sometimes children. This type of gold mining activities has a visible negative impact on the environment, but also an unseen negative impact on the education of children living around mines. For example, school dropouts tend to be higher in gold mining areas, to some extent due to the relatively easy access to paid labor that attracts children. My research interest was to identify the factors which are important for children to attend school and also for them to improve their test scores. I found that while families seem to be more important for children to attend school, schools and teachers are more important for them to improve their test scores. This can be explained by the fact that families can monitor the school attendance of children, but since many parents are illiterate, they may want to support children's studies at home but they do not know how to do so.

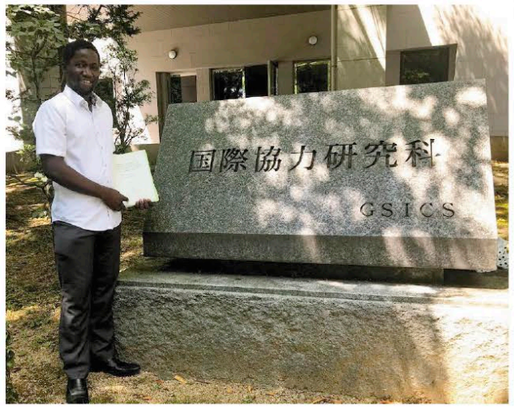
During my doctoral studies, I had the privilege to be a scholarship recipient of Honjo International Scholarship Foundation (HISF). In addition to the very helpful financial support, this was an opportunity for me to meet incredible people from different countries and different backgrounds. Attending community service and networking events, I have realized how globalized the world is, with students (like me) coming from all over the world to study in an environment likely different from their respective countries. These encounters have contributed to change me into a more culturally aware person, and I am grateful to HISF for offering me this opportunity.

More to learn but its already time to give back to society

I was able to graduate in September 2020, and even though I believe I still have much to learn, I believe I need to give back from the knowledge and experience I have gained so far. I believe that one of the best and impactful ways to do this is through education. Just like Nelson Mandela put it in a very nice way, "education is the most powerful weapon which you can use to change the world". From my background as a teacher, I have experience educating people, and I plan to continue on this path. I am now looking for a teaching job in a university to join academia. As a professor, I can pursue my passion of educating people and can also keep up conducting research, something I also enjoy as a scholar.

For students who are studying or want to study social sciences in general and education specifically, I encourage them to do so. All fields of research to some extent have to incorporate a social dimension of what they do, meaning that social scientists have a say in most aspects of society and science. When you study education, you are at the crossroad of all sciences, because there is no individual that is living in a society without having gone through some education, be it formal or informal. The path to knowledge is a long one and never ends. You will leave footprints that give direction onto new paths that your juniors will follow, and together we all contribute to make the world a better place.

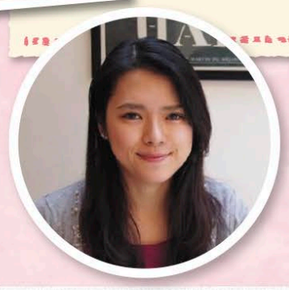
At a mining site during my field research in Burkina Faso



The day I submitted my doctoral dissertation

Essay ②

Are Ginza hostesses good listeners?



Nanase Shirota, Ph.D.
(2016~2020 HISF scholarship awardee / Japan)

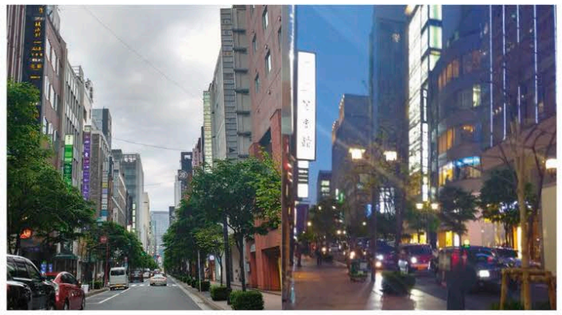
Master's degree (Sociology) at Keio University and at the University of Glasgow
PhD (Japanese Studies) at the University of Cambridge, 2020
Research focus: Anthropological approaches to "listening and hearing"

Observations of a luxurious night club in Ginza, Tokyo

At about 8 p.m. in Ginza, Tokyo, women with beautiful hairstyles fresh from the salon and a thick coat walk at a brisk pace to their luxurious night clubs for work. In Japan, these women are known as "hostesses," a job that mainly involves serving alcohol and providing pleasurable conversation to predominantly male customers. As their main task is offering conversation, they are often praised as being "communication professionals" or simply "good listeners." Well, what exactly makes them good listeners? How do they behave in conversation? And what does that behaviour mean? To investigate these questions, I worked as a hostess at Club Mizuno (pseudonym) in Ginza, conducting observation and interviewing hostesses and their customers.

Conversations with male customers and female hostesses

In this context, a good listener is never a passive figure. A good listener is one that plays the role of listening and that is involved in another's act of speaking. Hostesses of this kind of listener always smile, laugh out loud to what the customer says, find topics to talk about, ask questions about topics of interest to customers, listen earnestly to stories of hardship or conquest and praises such, make customers laugh via witty replies no matter how boring the topic might be, tease and allow to be teased, and show that they enjoy the conversation at hand. They might relay private matters or articulate their opinions to a small degree, but they never talk for long stretches, lecture customers, or dominate the conversational arena. (Sometimes, because customers are at the centre of conversation they feel like they are the source of laughter, even if it was the hostess that actually triggered the laughter.) Hostesses do not become too self-assertive but do not hold back too much as well. They can read between the lines, i.e., the feelings and desires of the customer and can know their place in the hierarchy between hostess and customer, can freely change language use from honorific, a certain dialect, and casual language to something more feminine, and can enliven interactions with exaggerated reactions and teamwork.



Streets of Ginza in the daytime, full of night club / Streets of Ginza at night, full of night clubs

Before the doors open at Club Mizuno (pseudonym) at 8:30 p.m.

If a hostess is with a customer named "Hidemaro," for example, the name of which sounds like a Heian-period name (794 AD–1185 AD), she might say to him, "So, can you play kemari?" (Kemari is a type of soccer played by courtiers in the Heian period), as a way to spark up the situation. If a hostess hears her customer say, "Today, there are only a few customers in the club, so it is kind of difficult for me to just leave," she might respond by saying, "But today, you reserved all of Club Mizuno, didn't you?" If a customer teases a hostess by saying, "You were wet that night, right?", she challenges him, saying, "You had a hard-on too!" Customers often therefore remark, "Experienced hostesses give witty replies, so it is fun" or "I visit hostess clubs so that I can have entertaining conversations." An experienced male concierge, also explains that "Giving praise is not enough. Anyone can do that. Professional hostesses titillate/entertain customers with conversation." Such conversations enhance intimacy and trust between hostesses and customers by evoking feelings such as having the same wavelength, feeling understood, being entertained, or feeling appreciated via the entertaining.

The laborious "listening" work of female hostesses

While hostesses in Japan are famous as communication professionals, it is also true that their work is often described as somewhat or almost pretending to have a romantic relationship or could be considered as a "sensuous love trade" or a commodified romantic relationship. Further, it is said that they sell their femininity or themselves through their sexuality (Allison 1996; Gagne 2016; Kawabata 1998, 2001). However, this is often the way of young, unexperienced hostesses toward attracting customers (Matsuda 2008), is only the initial source of attraction for customers, or is at least is a superficial and playful interaction with regular customers. What, then, do customers seek from hostesses other than sex appeal and the feeling of a romantic relationship. Also, what do hostesses sell? One theory for this is that it enhances male bonding, which is deeply related to Japanese corporate culture and which actually gives Japanese culture its longevity (Allison 1996). To improve male-bonding with potential business partners or their employees, male customers require the femininity of the hostesses, who objectify the customers as men, and the hostesses' skilful communication, which creates smooth conversations, makes customers relaxed and allows hostesses themselves to become a subject of the talk. The other theory is that especially regular and individual customers (unintentionally) enjoy these intimate and trusting relationships (Gagne 2016; Hojo 2014; Matsuda 2008). This understanding is also valid in terms of a "commodification of intimacy" regarding an analysis of male customers at both prostitution and strip clubs (Bernstein 2010; Frank 1998; Koch 2020; Huff 2011). On the surface, regular customers at luxury hostess clubs in Ginza can probably easily exemplify their wealth and heterosexuality, which rebuild their masculinity. However, at the core, they might be gratified by friendships with hostesses based on mutual understanding and trust or by intimate and authentic relationships that allow both sides to rely on each other in some way. Similarly, in my observation, I found that hostesses strive to create intimate and trusting relationships with customers, and, to do so, they tended to behave as "good listeners."

Sometimes I have been told by male customers that the job of a hostess is simply to listen, which is easy. However, is that so? Their labour is care work, emotional labour (Hochschild 2012), intimate labour (Boris and Parrenas 2010), healing labour (Koch 2020), and entertaining labour (Parrenas 2010; Takeyama 2016). Such labour is a type of work that women have tended to perform in society unknowingly and elsewhere, and this is difficult to see and to evaluate. Moreover, the essential skill for such types of labour involves listening. Listening thus can be a type of labour service inadvertently carried out by many women in society, Japan or otherwise.

A farewell cheers, sipping Dom Pérignon on my last day of work

Eating ramen at a noodle stand at 3 a.m. in the Namiki streets, everyone still at work

Essay ③

Building bridges in Thailand : the reflections of a farang※

Justin Kraemer, Ph.D.
(JAA-Honjo Scholarship awardee in 2010 / Canada)

PhD from Rutgers University, the State University of New Jersey, USA.
From January in 2019, a lecturer at School of Management, Business Administration in Mae Fah Luang University (MFU), Chiang Rai Province, Thailand

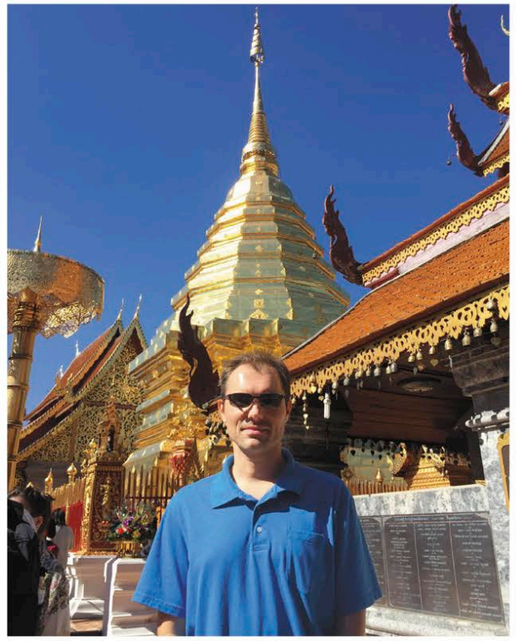
※ Farang is a generic Thai language for white people.

An introduction ~How I got there

Unfortunately, when I received an award from the Honjo International Scholarship Foundation (HISF), Japan was in the midst of the great North East Earth Quake and Tsunami. With the utmost respect for HISF, I felt it best if the funds that were graciously awarded to me were used in the relief effort. Further, the gravity of this event and the death of both my parents during my dissertation lead to a less-than-ideal research outcome. Though over time, my focus has shifted to helping Japanese and non-Japanese alike to navigate the demarcations that are barriers between them, I remain ever-more committed to the ideals of the HISF. Namely, to build bridges and connect different types of people. In fact, I not only have been volunteering with https://x-culture.org/ for many years but also began employment at MFU in January of 2019. Though the job in Thailand allows for an satisfactory standard of living, it more importantly enables me to spend more time on my research and to help those of my students who are excited about connecting with non-Thais. In this new role, I look forward to providing the quality of research and instruction that is worthy of HISF as well as the contributions it makes to harmonious relations between members of different nations.

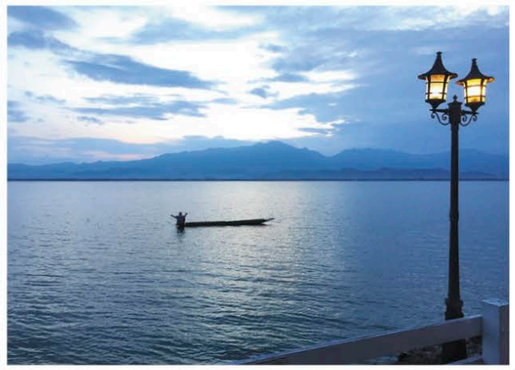
Everyday adventure in Thailand

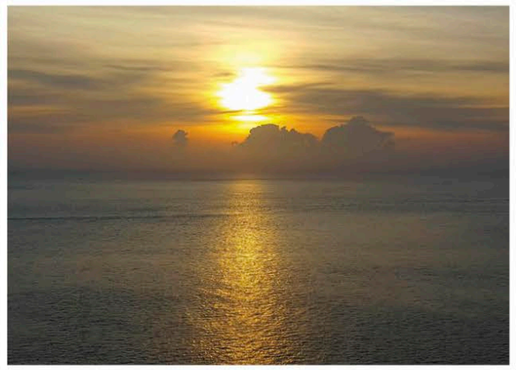
As for being in Thailand… it is a constant adventure. Each day is filled with surprise; some good, some bad. For example, all year long, the weather is warmer than even the summer months of my home country of Canada. However, the ants/insects that thrive in this ever-present warmth are plentiful. Further, since I am often the only instructor taking the on-campus mini-bus, my students have plenty of opportunity to demonstrate the traditional custom of the "wai" (bow) to me. Though it is common to see street vendors selling snacks and meals of unimaginable varieties, I would likely get ill if I was excessively adventuresome. On a more serious note, navigating the English-Thai language barrier is challenging. However, I find no shortage of caring and hard-working people. The Thai people come in all shapes, sizes, colors and orientations. In fact, their willingness to interact with others in a genuinely non-judgmental manner is a characteristic of their society that I would strongly suggest be adopted by the people of many other nations.



Western perspective

Though I obviously observe them from a "Western" perspective, I also find that the system(s) in which these very talented people work prevent them from reaching their full potential. Also, common to other cultures/nations, the odd selfish person (domestic or foreign) can be the bad "apple" that spoils the "barrel". Finally, though not my expertise, I believe that greater knowledge exchange between Japan and Thailand has the potential to play a great influence in reducing the hazardous air pollution from cyclical burning of agricultural fields (e.g. rice), a problem that Japan seems to have expertly-solved.





Hello!

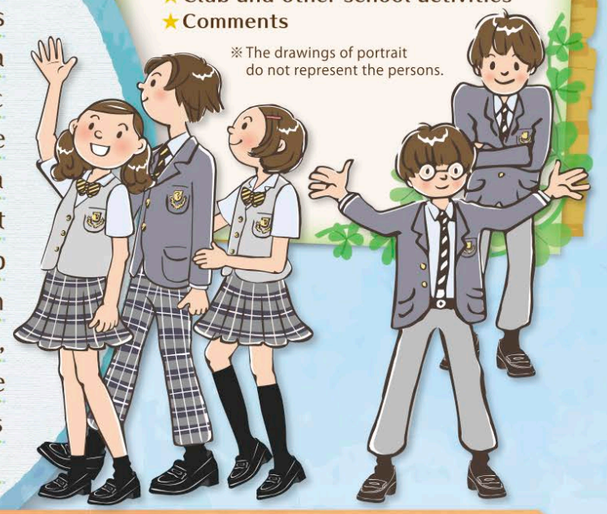
We are the first generation of students chosen for the Scholarship for Japanese High School Students program!

The Scholarship for Japanese High School Students program started in the spring of 2020. The main feature of this program is that student awardees that advance to a national, prefectural, or other public university or college can continue to receive a monthly stipend of 50,000 yen as a scholarship fund until graduation. A select group of persevering high school scholarship students from all over Japan have been working hard in their studies, club activities, and other extracurricular activities with the aim of advancing to university. Let's welcome them into Honjo family!

The students will be introduced as below geographically from north to south based on the locations of their respective high schools.

★Name of school / Name
(Everyone is in the second grade.)
★Club and other school activities
★Comments

※The drawings of portrait do not represent the persons.



Hokkaido Suttsu High School Fuka Goto

I am a member of the badminton team at my high school.

My future dream is to become a high school teacher of the English language. Since childhood, I have long dreamed of being a school teacher. This has never changed, but now my hope is to teach the English language to many people and to provide guidance to students that feel anxious about the future and to lead them in a helpful way. After graduating from high school, I will go to university to study English and education science. As a result, I hope to become a teacher that is loved by many people.

Akita Prefectural Akita High School Urara Sasaki

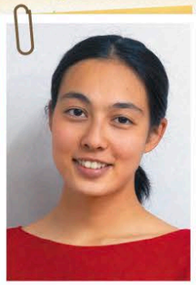
Since I started at Akita High School, I have been a member of the school's music club, focusing on easy-listening music. I enjoy playing music with our band of four members, who are also students at the same high school. We compose music and practice playing it with the goal toward participating in the band wars for high school students in Akita Prefecture. Also, since summer this year, I have belonged to the JRC club so as to participate in volunteer events/activities so as to promote an understanding of international affairs.

My hobby is playing guitar, painting, and baking sweets. I am not good at these yet, but I want to improve my skills. My favorite subject is English. To improve my English skill, I participate in English speech contests or debate contests. My hope in the future is to engage in working internationally, so I want to improve my English skill toward gaining a level well-suited for business use. In thanking the foundation for selecting me as one of its first-round scholarship students, I will continue to make efforts toward studying and other activities as well.

Miyagi Prefectural Furukawa Reimei High School Mikoto Sasaki

I belong to the brass band club, and I play trumpet. We are practicing with my band members for the purpose of participating in an ensemble contest.

My future dream is to become a high school mathematics teacher. I want to not only teach math in a way that's easy to understand, I want to show people the attractiveness and value of learning math. To become such a teacher, I will continue my effort of study toward the goal of passing my first-choice university.



Gunma Prefectural Numata Girl's High School Rere Shiono

I do not belong to any sports team at my school, but when asked I join the soccer or tennis team and take part in games as a temporary player. With the time that I save by not joining teams full-time, I make effort so that I can excel in speech competitions, etc.

My hometown, Minakami Town in Gunma Prefecture, is full of seasonal nature and pure air, and there we can encounter many wild animals. Because I grew up around nature, nature spots are my favorite places to hang out at. Also, my favorite subject is English. My goal is to become an international civil servant working to save children in poor environments. My skills and abilities are not high enough yet to achieve my goal, but I will continue to strive at this daily.

Saitama Prefectural Iruma Koyo High School Y. F.

I am a member of the central committee in my class. The central committee's duties are to support the executive committee when school events are held and to hold discussion about how the school can be improved, in cooperation with the school committee. I also belong to the women's soccer club. This year, we gave it our all in the championship tournament, aiming for participating in the Kanto-area championships. Our many trials & tribulations have provided us with opportunities to discuss how to advance. As a result of that, our teamwork abilities increased. In the end, however, we did not get our goal, but using our experience as a springboard, we continue to practice every day.

Recently, I have become to like reading. Reading relaxes me and reminds me how much I can learn from books. I have fun when I find something useful in a book. I think reading is necessary and can help with bringing satisfaction to our lives. Although I have not yet decided what I really want to do in the future, my hope is to be independent so as to give back to the people that have supported me.

Saitama Prefectural Urawa Girls' Upper Secondary School Tomomi Sagara

I belong to the SSH club.

My hobby is listening to music. I also like playing musical instruments. When I was a junior high school student, I played the trombone in the brass band club. As I already mentioned, at my high school, I belong to the SSH club. In the club, my current research involves "Finding effective natural products to promote callus induction of Kalanchoe daigremontiana."

Kanagawa Prefectural Sumiyoshi Senior High School Ren Morikawa

I am a member of the baseball team at my school, and I am in charge of general affairs in my class.

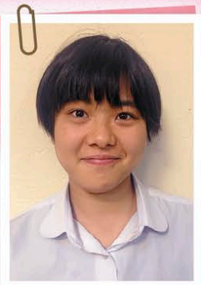
I like body training and hanging out with my friends. My favorite subject is social science. My future dream is to become a teacher, using my good knowledge of sociology and my ability in communication.

Yamanashi Prefectural Kofu Showa High School Asuka Hanawa

I belong to the dance club at my high school. I am practicing dancing everyday with my club mates, aiming for our best performance. We perform our dance at school festivals or at events in our local community.

My hobby is listening to music and watching movies. I like to become fully absorbed into my favorite things. My dream is to become a nursery school teacher, who is loved by many people. I am studying hard to make this dream come true. My local area is full of nature, and one of its special agricultural products is a type of sweet potato known as yahata-imo.

Hyogo Prefectural Kobe Commercial High School Yuki Tsuzaki



I am a member of the school's table tennis team.

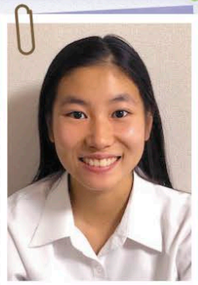
My high school is Kobe Commercial High School. Some of the subjects that we learn about are not taught at normal high schools. We are packed everyday with license examinations held almost every month and preparation and study for such. This studying is sometimes very difficult but is also very rewarding; therefore, we attack our studying so as to get our goal. Since my goal is to go on to university in Osaka after graduating from high school, I will continue my efforts to obtain every license that I can during my second year.

Nara Women's University Secondary School Niko Ozawa

I belong to the SSH (Super Science High school) Chemistry Team. My research there involves "collecting and removing heavy metal ion in water by using coffee." The polyphenol and fiber included in coffee has the ability to absorb heavy metal ions! Also, I prefer the humanities or social sciences, and I was not good at chemistry, but I found myself enjoying this research, and now my dream is to become a researcher.

My hobby is embroidery and watching sports such as sumo or soccer. I like to both watch and play sports. In supporting my favorite soccer team, I wanted to actually play it too! In the end, I was able to organize a women's soccer team all by myself!

Takamatsu Daiichi High School Satori Tatara



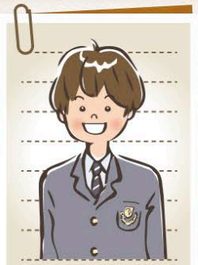
I have been doing kendo since I was a junior high school student. I first witnessed kendo when guided tours at junior high school were held for selecting extra-curricular activities. I was attracted with the intensive offense and defense moves and the sharp individual skills necessary, and I decided to join the kendo team. Since my dream is to work for the police, the techniques developed through Kendo would no doubt be helpful for me in the future. Day in and day out, studying is tough, but I will continue to make effort in both study and sport.

My hobby is reading. Reading is a great way to gain knowledge and know-how, and it constantly expands my world. One of the most-memorable words of advice that I have come across in a book was this: "What you choose is never wrong. If you consider it wrong, then you had better change it into right." Since reading this, I have come to consider things in a positive light. From now on, I want to challenge myself to just keep reading, so as to broaden my view of the world.

Kochi Prefectural Hata Agricultural High School Raimu Okai

I am a student at an agricultural high school located in the western area of Kochi Prefecture. We study not only general subjects such as the Japanese language or mathematics but also subjects regarding agriculture such as agricultural products or animal science. In practical training, we cultivate agricultural products such as rice or potato, we breed and manage animals such as cows, pigs, and chickens, and we take part in meat processing. I don't belong to a club, so instead I am focusing on themed research and on studying for higher education at university.

When I was a junior high school student, I belonged to the music club. I like listening to music. I like the band "THE ORAL CIGARETTES," and I often listen to their music. My favorite subjects are mathematics and natural science. My current goal is to join a department of agriculture at a university and engage in agricultural research using the experience that I gained in agricultural high school.



Oita Prefectural Oita Nishi High School Koshi Abe

I am a member of the badminton team at my school. I am also the vice president of my class.

My high school is a general high school, and I aim to go on to higher education. Therefore, at this high school, we can take subjects that are more matched with our abilities and that can lead us to our goals. My goal is to become a computer programmer, so I am taking a sciences course so as to focus on that subject.

Kumamoto Prefectural Kumamoto High School Ryoto Horita

I belong to the shogi club.

My favorite subject is physics. My interests are space physics, nuclear physics, brain science, genetics, evolutionary biology, history, and philosophy—I am interested in many fields. My hope is to spend time in fulfilling and meaningful ways and to be engaged in what interests me, while also conducting research at a university.

Kumamoto Prefectural Kumamoto High School Airi Hatanaka

I belong to the Physics club and Chemistry club at my school.

Currently, my research involves chemical batteries and Daniel batteries. My hope is to develop a battery that can provide power at any time, be easily manufactured, and last a long time.

Okinawa Prefectural Kyuyo Senior High School Hina Tokumoto

I belong to the Super Science Biology Club. (we research the Ogasawara cockroach!)

Hello, everyone! My future plan is to become a general practitioner that works to advance medical systems in remote areas and to help create a society where people live safe & sound. Now, I am focusing on the activities that even a high school student can undertake so as to contribute to society. I am looking forward to talking with you all!

Okinawa Prefectural Naha Kokusai Senior High School Nanami Nakasone

I belong to the dance club.

I am the captain of our dance club, which is called "Stajaker." Our club is so popular at my school that our members number up to 60! Our members are students in their first and second year of high school. When I started to be captain, I really doubted whether I could play such an important role and felt tons of anxiety. This year, we were not able to practice that much because of COVID-19; however, we used our team synergy to overcome the difficulties, and we actually finally won third prize at the Gakuaru FESTA dance contest. This was our first award, and it really helped build our confidence. We have been practicing every day in preparation for a dance contest known as "DANCE STADIUM," which is held in January 2021. We will try our best to be original in our dance moves, so as to obtain a great result.

Reunions held

Reunion in Korea

February 15, 2020 (Sat.)
Obaltan, a restaurant in Seoul

This was around the time when COVID-19 started to spread in Korea slightly before it did in Japan, and people in Japan began to refrain from traveling overseas, but at that time we still thought that, due in part to the fact that Japan is an island nation, it would be possible to prevent the virus from entering at ports and airports. Given this, I decided to take advantage of the warm welcome from everyone in Korea and got on an airplane for Seoul. As soon as Dr. Ha Donghyun met me at Gimpo International Airport, he handed me a mask. I never imagined there would soon be a shortage of masks in Japan as well. We got together with Mrs. Lee Hwajeong, who had flown to Korea from Japan earlier that day and who was waiting for me, and we checked into the hotel. Then, we walked around the fish market in Seoul and along the Han River. It snowed a little, and a cold breeze was blowing along the river, but I saw a lot of magpies in a park there and hoped something good would happen to me. There are lots of magpies around town in Korea, similar to the crows in Japan, but they are smaller, have better colors, and are pretty. In Korea, magpies are said to bring luck. Of course, I had the chance to see a lot of my dear Honjo family later that day.

At the reunion, thanks to the creative preparation and planning by Mrs. Lee Hwajeong and Dr. Jung Uijin, we had a fun and enjoyable time. I hadn't seen Dr. Yeom Jungyeol and Dr. Lee Bumkyu for a long time, and they said "We forgot how to speak Japanese because we don't speak it anymore" in fluent Japanese.

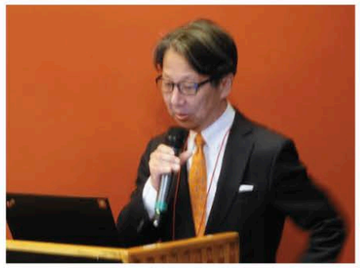
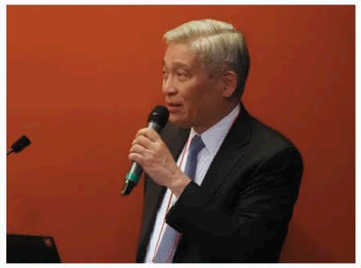
The climax of the reunion was unexpected. Dr. Hong Byungchul, who was a first-generation student, had a letter from his wife addressed to the director, Mr. Ryusuke Honjo. He was going to simply hand it to the director, but was instead given the opportunity to read it in front of everyone. The letter said that, while studying in Japan, Dr. Hong Byungchul had an interview with President Masanori Honjo for the scholarship program at the chairman's office at Ito En Building. After the interview, President Masanori Honjo called Dr. Hong Byungchul's home and talked to his wife. The president told her that Dr. Hong has worked hard to study abroad in Japan and that both he and his family are facing many challenges during this time, so it is important for her to support him. His wife wanted to thank President Masanori directly but didn't have a chance, so she wrote a letter for Dr. Hong Byungchul to hand to director Ryusuke Honjo. No one, not even the secretariat, had ever heard the story before. As Dr. Hong Byungchul read the letter, recalling the hardship he faced while studying in Japan, his eyes filled with tears and his voice trembled. Over the past 20 years, the daily life of international students and Japan-Korea relations have drastically changed. However, it cannot be said that everything has improved; Japan-Korea relations have had their ups & downs. Some students have an easy time abroad, while others have to work their way through school similar to life decades ago. It is not easy to provide mental support, but I felt like the late Masanori Honjo was telling us now, almost 20 years after his death, through a former international student from South Korea, to support the students with a big heart. I realized that I exist in an enormous universe beyond human capabilities, and it felt something like reincarnation. However, this was not the first time that I felt this way. Whenever I hear stories of time abroad from Korean students, I feel like I am hearing the voice of late President Masanori Honjo from deep within a mysterious universe.

Reunion in NY

February 19, 2020 (Wed.)
Japan Society of New York

I flew straight from Seoul to New York to hold an exchange meeting with current and past students in the United States and Canada. As COVID-19 had already begun to spread around the world, I was nervous during the long flight. I did not feel comfortable wearing a mask at that time, so I almost never wore it although there was a chance of getting the virus. Now I can't believe what I was doing. There were a few news reports about Asian people getting attacked in New York following word that an unknown virus had spread from Asia. However, almost no one wore a mask, and they did not seem approving of people that wore a mask.

Thanks to the efforts made by Mr. Takumi Nishihara, who took vacation to join us from Japan, and Dr. Hiroyuki Igarashi, who lives in Canada, as well as the smooth handling by Mr. Trace Otsuka of ITOEN (North America), the reunion was successfully held at Japan Society. I was glad to have been able to finally meet in person with the people from the JAA, JMSA, and CSSW, whom I only knew through email, as well as the scholarship students. Mr. Gary Moriwaki of the JAA, Dr. Shunichi Homma of the JMSA, and Professor Jeanette Takamura of the CSSW gave passionate speeches. Thanks to the efforts of ITOEN (North America) President Mr. Yosuke J. Oceanbright, we were able to have a cozy, at-home-like, Japanese-style gathering in the big city, and hopefully it was a good opportunity for people that have been away from Japan for a long time to think fondly on Japan. Also, we were able to realize that there are many excellent researchers and doctors in a variety of fields within the Honjo family, and I hope to continue having an even-closer relationship and more exchange.

On the next day, Professor Jeannette Takamura of the CSSW made special arrangements for me to visit the Metropolitan Museum of Art. On the following day, I participated in the Central Park Half Marathon along with Dr. Kensuke Suzuki, who is currently studying at Columbia University. I would like to express my sincere gratitude for the warm welcome I received from everyone.

Just about a week after I returned from New York, COVID-19 hit the city, international flights started to be cancelled, and the virus situation quickly became an issue no longer confined to just Wuhan, China. And many of the doctors that I met at Japan Society became very busy taking care of patients infected with COVID-19, and we often saw Dr. Yuichi Shimada of Columbia University and Dr. Robert Yanagisawa of Mount Sinai Hospital on TV and in internet news in Japan reporting on the status of infections and on the medical systems in New York. Healthcare workers are still risking their lives to save others almost one year later, and I am very grateful for their dedication.